

牧師室から (2022.9.18)

また父のことである。もう辟易されている方も多いかも知れないが、もうしばらくお付き合い願いたい。

父は病院から後一週間と言われ自宅に戻って、その期日が過ぎた。何も食べられずにリンゲル液の点滴で命をつないでいる。他には蜂蜜、バニラアイス、葡萄ジュースを少しではあるが好んで摂取している。しかし最も求めるものは氷水である。「これが今までで一番美味しい」と何度も言う。昔国語の教科書にあった宮沢賢治『永訣の朝』の「あめゆじゅ」を思い出した。親を看取るのは順番であるが、妹を看取るのは寂しかったであろうと思った。彼は仏教徒であったが、後半生には『銀河鉄道の夜』のようなキリスト教を漂わせる作品も書いている。

そこで思うのだが、人（特に日本人）は晩年や、死期が近づくと汎神論的になりがちであるような気がする。実際にそのような事例をよく耳にもする。自分自身については、真の神への信仰を失わずに最期を迎えたいと思った。

「主よ、みもとに近づかん。十字架の道 行くとも、わが歌こそ、わが歌こそ、
『主よ、みもとに近づかん』。」（讃美歌 21 - 434）

（ 鈴木淳一牧師）